

平成二十九年十一月一日発行 第二十七卷第十二号 通巻第三一八号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

平成29年12月号

岡井省二創刊

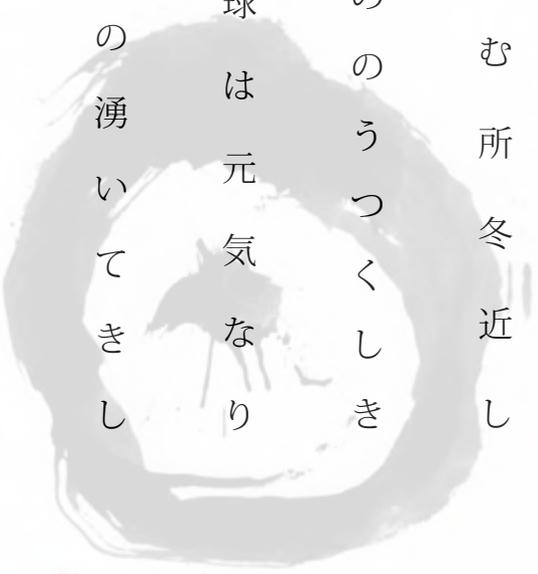


蓼食ふ虫

高橋将夫

泥足のままでくつろぐ蓮根掘
人の世に蓼食ふ虫と放屁虫
人間にあつて案山子に無き余生
粧へば山も人間くさくさなり

月にもう戻る場所なしかぐや姫
その奥に鬼のくつろぐ秋簾
君が今たたたむ所冬近し
紅茸や毒あるもののうつくしき
台風地震地球は元気なり
秋風や怒る元気の湧いてきし
虫時雨フイナーレはまだ先のこと



槐安集

水野恒彦

いわし雲人の流離を誘ふなり
石人の動く幻影夕月夜
無花果や過ぎたる日々に熟れぬたる
鶴渡る海の面の古鏡めき
銀漢や方舟に乗る老ひし吾

加藤みき

青北風や湯あがりの身の手櫛なる
温め酒下戸もこの香に誘はれ
暮つ方慌ててゐたり大花野
車庫入りの車輻の音や秋の澄み
花野から大花野へと人の数

中島陽華

親指姫トントン釣の鮎食して
心(うら)星に両手の届く踊りかな
秋立つや滅法弁当好きになり
八朔や祭文語りの命日に
爽涼や金星匂ふ翠檜

竹内悦子

かなぶんも来て輪の中に省二の忌
一つだけ傷ある酸橘匂ひけり
鯛のこゑよあの世の父と母
月見草斜かひの道通りけり
句碑熊野こくねなぬの初紅葉



雨村敏子

頭陀袋に何かごろごろ水の秋
白桃を畏み未だ刃を入れず
閑伽棚の板一枚や天の川
隈取りに月さしてをる鬼の顔
いち日の無為の楽しさ地虫鳴く

本多俊子

初茸や山の木霊の音すなり
喪服ふと白粉花にふれにけり
一行詩秋のしぐれの中にあり
紫苑咲く花のゆかしさ匂ひ初む
詩の神のささやく闇の笑ひ茸

近藤喜子

木犀の香や夕闇にくちづけす
星を摘む夢みん花野きたる夜は
人の世を遠く離るる月の道
日輪の重たさに裂け柘榴の実
落鮎のみ知つてゐるなり水ごころ

瀬川公馨

曼珠沙華はるか彼方に柵氷
吹き漆に虫の屍や秋団扇
裏山に生き人形や百合の群
葛かづら生まれながらの追つ手なり
白露を分けて菩薩の来たりけり

久保東海司

明滅の螢頭上を低く輝る
篝火に鶉繩のもつれほぐしやる
みの虫の糸の長さを目で測る
火祭の火の粉すだれを地にはじけ
航く濤をうちかぶる鶉の浮寝かな

柳川 晋

誰もゐてへんし高きには登らへん
草相撲あるひは劇場型政治
蝮姑鳴くや時々成就する予言
北斎の八十八歳菊の赤
へだたりに木賊の見ゆる此方かな

熊川暁子

木の実独楽草のほひを風にして
秋灯下夫とは別の自適あり
待つことに慣れて今でも居待月
風紋を色なき風が繕へり
来る人はやがて去る人いわし雲

寺田すず江

大癡おおべし見秋を探しに行くしみと云ふ
記録など意識のそとに蟋蟀とぶ
雁渡し息吹をとどむエンタンス円柱
川音の遠くなりゆく霧襖
わたくしの彩を譲らず曼珠沙華

岩下芳子

東の暁は白き曼珠沙華

ガム噛んでとんぼの顎疲れたる
望月の滲んでゐたる水の上
晩稲いま穂孕みのとき迎へたる
平成のゴール近づく夜長かな

近藤紀子

酌み交はさうちろよおいで子の椅子に
無花果をぱくりと割りて半分こ
憎めないシオカラトンプの頭突きかな
子規忌またカナカナの鳴く伊予訪はな
秋思深むわが身ほとりの本の山

岩月優美子

テノールの余韻抱きて鰯雲
日も月も知らぬ魚や深海は
秋思ふとロートレックの影にかな
花野来て人間らしさ取り戻す
マスカット食めば清らかな血の流れ

竹中一花

婚礼の朝は涼しき松の風
色のなき風を起して列車過ぐ
盃交す知らぬ同志や菊膾
露の灯を点し更けゆく祇園かな
韋駄天を追ふ台風や鬼界島

前田美恵子

冥界の入口なるや水澄める
鬼子母神目覚めてをりし蛇穴に
青北風や交差してをる獣道
黄落の真只中のベンチかな
甍りの井戸の深みや鉦叩

中田禎子

流星や一条戻橋にこ糸
相照らす月と大日槐山房
金風の硯の海をわたりけり
月光や百の眼と奥座敷
冥界の惑星葡萄醸さるる



槐市集

岩田洋子

極太の芋虫の色雨上がる
大花野大型バイク結集す
山よりも海に焦がるる鱚雲
病床や草の穂高くなるばかり
腰痛に百万ボルト星月夜

植木戴子

漣の空のありけり秋彼岸
新しき鯨のあり涼新た
鱗雲鉤かけをる漢かな
れこじやらし赤き半纏着てみたる
肖空や稲穂の中に好々爺

江島照美

待つ人の扉を開く夜の桃
少年の夢は美し秋の虹
人の世に柵もなく寝待月
天高し母の乳房も揺れてをり
故郷の遠き淋しさ草虱

岡田桃子

青芒たつきの水へ開きけり
石積み石横断の蛇の衣
ほろ酔ひの夜道かすかに金木屋
木犀の香をつき抜けるセーラー服
東京へ明日届くてふ今年米



萩布 貢

夜なべして書き直す文金釘流
皇室の慶事寿ぐ菊日和
無駄の無いドミノ倒しや稲刈機
下校時の景色の変る稲架の道
晩酌の一本すすむ虫の声

久保夢女

オーイ雲急がなくとも九月なり
秋の声もう聞きしかと文を遣る
底紅や女の度胸試すべく
萩叢を三巡りすれば叶ふ恋
虫の音を掻い潜りたる眠りかな

後藤マツエ

秋風やまだ仮の世に永らへて
白桃おさえ髪の八百屋に睨まれる
秋場所や馴染みの力士みな勝ちて
捕虫網ただ振り回す楽しくて
突然の晴れ運動会は神の加護

阪倉孝子

萩こぼる風の甘かり獣道
遙かより誰か呼ぶ声雁渡し
かたまりて民話聞きをるちちろの夜
酔芙蓉天界を恋ふ色となり
月光にガラスのスワン濡れてをり

柴田靖子

万物に水は命と鳥渡る
安らぎを鶉の高音にやぶらるる
足裏にほてり伝うる敷紅葉
易きにながる身をしめん萩の声
数多の声の賑にぎし柿落葉

庄司久美子

反魂草人喰岩の静まりに
鳥の飛ぶ十三重塔初紅葉
地均しは三筋の秋の滝の音
秋の日や信長堀の縞模様
白露や三女の神の屋根の草

槐集

高橋将夫選

露の世の露に濡れゆく墨衣
大阪 藤田美耶子

月天心自分の影とワルツかな
糸とんぼ風に姿をかくしけり
朝顔のつぼみに宿る明日かな
いびつこそ個性のあかし花梨の実

江島 照美

芋嵐鄙にも波乱ありにけり
冬瓜や染まり上手は生き上手
おびき寄す囀は何も知らぬまま
今日までにすべては夢の花野かな
岐れ道どちらをゆくも秋天下
行先は風が教へる赤とんぼ

有松 洋子

陽気な木陰気なる木も紅葉せり
ひらひらと月光を着て亡き子来よ
宙無音銀河の粉の降りつづく

重陽や闇に一縷のひかりあれ
岡崎 犬塚李里子

秋の夜の書棚より取る禪の書
鳥影の過ぐ秋空の蒼き黙
秋霖に溶け入りさうなコンチェルト
明星の点滅に海鼠動きをり

吉田 順子

天日は炎えてもしづか吾亦紅
夕暮に影ゆれ匂ふ杜鵑草
たましひの身より離るる秋の闇
独り居に寂の一字や秋夕べ
朝霧草日の出前なる光かな
団栗はどこに落ちてても無表情

守口 三木 享

日常をピカソのやうに見る蜻蛉
秋の雲 i P S の多様性
銀河から零れ落ちたる深海魚
秋澄めり出土の埴輪みな真顔

糸とんぼ 風に姿をかくしけり 藤田美耶子

か細い糸蜻蛉の風に吹かれるさまが巧みに表現されている。

〈露の世の露に濡れゆく墨衣〉の句、高僧もまた露の世の露に濡れるのだ。

〈月天心自分の影とワルツかな〉の句は、「月天心」から「自分の影とワルツ」への転調が痛快。

〈朝顔のつぼみに宿る明日かな〉の着眼、へいびつこそ個性のあかし花梨の美〉の主張は正鵠を得ている。

客観が主観を育て青どんぐり 江島 照美

物をよく見つめてこそ見えてくる主観がある。青いどんぐりが茶色になってゆく。

〈芋風韻にも波乱ありにけり〉と〈おびき寄す囃は何も知らぬまま〉の句の着眼は本質に迫っている。

〈冬瓜や染まり上手は生き上手〉の句、賛否はともかくとして、作者らしい人生観だと思ふ。

〈今日までのすべては夢の花野かな〉の句、「花野の夢」であるところが芭蕉の「枯野の夢」や太閤の「露と消えた浪速の夢」とは異なる点に注目。

行先は風が教へる赤とんぼ 有松 洋子

風の中の赤蜻蛉の様子を巧みに捉えている。

〈岐れ道どちらへゆくも秋天下〉と〈陽気な木陰気なる木も紅葉せり〉の句はそれぞれ事の本質を捉えている。

〈ひらひらと月光を着て亡き子来よ〉の句の「ひらひら」と〈宙無音銀河の粉の降りつつく〉の句の「銀河の粉」は、どちらもこの作者ならではの感性の表出。

星の点滅に海鼠動きをり 犬塚李里子

「明星の点滅」と「海鼠動き」の取り合わせがユニーク。

〈重陽や闇に一縷のひかりあれ〉の句はまさにこの作者ならではの精神の風景。そして、〈秋霖に溶け入りさうなコンテェルト〉はこの作者ならではの感性の一句。

天日は炎えてもしづか吾亦紅 吉田 順子

天日 日輪と書くと穏やかだが、その光は原子核反応によるエネルギー。「吾亦紅」の輪旋が適切。

〈独り居に寂の一字や秋夕べ〉と〈朝霧草日の出前なる光かな〉の句、どれもこの作者ならではの穏やかな精神の風景。

銀河から零れ落ちたる深海魚 三木 亨

この地球の深海魚のルーツは、実は天の川の川底から零れ落ちた魚かもしれない…そんな気にさせられる一句。

〈団栗はどこへ落ちても無表情〉の句の「無表情」、〈日常をピカソのやうに見る蜻蛉〉の「蜻蛉の複眼とピカソ」、〈秋の雲IPSの多様性〉の「秋の雲」から「IPSの多様性」への飛躍に脱帽。

〈以下略〉